

I 研究主題及び副題

「分かる」「できる」喜びや実感をもち、確かな学力を身に付けた児童の育成
～「書くこと」の領域における言語活動の充実を通して～

II 主題設定の理由

1 現代社会の要請

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。そのような中、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査などの各調査からは、我が国の児童生徒については、「①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題」「②読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題」「③自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題」が見られることが分かっている。

このような状況から、平成17年2月には、文部科学大臣により21世紀を生きる子ども達の教育の充実を図るため、教員の資質・能力の向上等を図るよう要請を受け、教育基本法等の改正が進み、知・徳・体のバランスとともに、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視し、学校教育においてこれらを調和的にはぐくむことが必要である旨が法律上規定された。上記のような児童生徒の課題を踏まえ、平成20年1月に、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申が出された。その中には、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」等を基本的な考えとし、学習指導要領の改善の方向性が示された。それを受け、改善された新学習指導要領が昨年度から完全実施された。その中で、重要視されていることの中に「言語活動の充実」がある。新学習指導要領の中では、「各教科の指導に当たり、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の充実を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」が指導計画を作成する際の配慮事項として挙げられている。特に、言語に関する能力を育成する中核的な国語科において言語活動例を例示し、言語活動の充実を図ることを大きな柱としている。

このような観点から考えると、あらゆる学習の基盤となる国語力は、日本文化の基盤であるとともに、私たちの日常生活において欠くことのできない能力であり、その重要性は増していると考えられる。したがって、国語力をはぐくむために弛まぬ努力を積み重ねていくことは、学校のみならず、家庭や地域社会の場においても時代を超えて重要なことである。

2 本校のこれまでの取組

本校では、平成20年度から、「基礎・基本を習得し、活用する力を身に付けた児童の育成」を主題に掲げ、国語科における「読むこと」の力を高める指導方法の研究を行った。さらに、平成21年度に研究主題を「主体的に読む力を身に付けた児童の育成」とし、「『読むこと』の基礎・基本の系統表」「国語科のウォーミングアップ事例集」等を作成し、「読むこと」に関する系統性や具体的な授業実践の在り方について充実を図ってきた。そして、22年度は研究主題を「『分かる』『できる』喜びや実感がもてる授業づくり」副題を「電子黒板のよさを取り入れた国語科の授業デザインの構築を目指して」とし、本校に配置され

た電子黒板のよさを取り入れた授業デザインについての研究を行ってきた。その中で、授業デザインの基本形として、「『本時の目標』→『本時のめあて』→『めあて達成の確認』」という一連の流れの中で授業を展開していくことで「分かる」「できる」児童の育成を図ってきた。そして、昨年度は研究主題を「『分かる』『できる』喜びや実感をもち、確かな学力を身に付けた児童の育成」副題を「国語科における言語活動の充実を通して」とし、言語活動の充実を図った指導を意識して実践してきた。特に、単元を貫く言語活動を意識することで教師も、児童もゴールイメージを明確に持ちながら学習を進めることができた。一方、課題としては各領域の言語活動例のとらえ方が不十分であり、深く研究を進める上で領域を焦点化する必要があること、めあて達成の確認の仕方について内容及び質の向上を図る必要があること、また「新学習指導要領の内容及び評価の観点についての研究の必要性」「児童の『分かる』『できる』喜びや実感に関する評価の指標の明確化」などが挙げられる。

3 主題に関わる児童の実態

本校は、18011人（平成24年3月1日現在）が住む新富町の中心地に位置している。全校児童数は、648名である。昨年度の学力の達成状況については、CRTの結果を参考にすると、言語事項を除く全領域について全国平均を下回っている学年が多い。

【観点別得点率全国比】

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
1年	97	99	95	99
2年	94	92	95	101
3年	91	90	103	94
4年	95	100	99	100
5年	98	95	104	103
6年	103	109	114	112

また、昨年度の12月に児童に対して行った国語に関する意識調査では、「国語が好きですか」という質問に対して「好き」「どちらかというが好き」と答える児童が7～8割、「国語の学習は、よく分かりますか」という質問に対して「よく分かる」「どちらかという分かる」という解答が8割という結果になっており、国語の学習に対する関心が高いことが考えられる。また領域の中で「書くこと」に関し「国語の学習の中で、書くことは好きですか」という質問に対し、他の領域より苦手意識を持つ児童が多く、「どちらかという嫌い」「嫌い」という解答が、学年が進む程に割合が多くなっている。

【意識調査「書くこと」%】

	とても好き	どちらかというが好き	どちらかという嫌い	嫌い
1年	65	18	13	4
2年	60	23	10	7
3年	52	26	11	11
4年	42	30	18	10
5年	23	43	29	2
6年	25	45	23	7

以上のような結果が出てきた原因として、以下のようなことが考えられる。

- 児童は、国語の学習に関しての関心は高いが、日常の学習の中で習得したことを実生活の場面で活用したり、生かせなかつたりする。それは、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域で落ち込みが見られるため、日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を行う能力を確実に身に付ける必要がある。特に、「書くこと」の指導事項を学年にに応じて確実に身に付けていないため、書くことに苦手意識をもち、「書くこと」の領域において落ち込みが見られる。
- 教師は、授業デザインを行い、めあて達成の確認の場の工夫を行ってきたが、確かな学力を身に付けるための指導方法等が不十分な点があった。

4 主題研究の目指す方向

学ぶ意欲をもち、確かな学力を身に付けた児童を育成していくために、本年度は落ち込みの見られる領域の中で「書くこと」に絞り、言語活動の充実を図りながら、その指導方法について研究を推進していく。また、評価に関する研究を推進し、さらなる指導へと生かせるようにする。そのためには、必要感があり、より実践的な研究の推進を行う必要がある。また、見通しをもち、全職員で共通理解を図りながら、共同実践をしていくことが重要である。

このようなことを踏まえながら、本研究の主題及び副題である「『分かる』『できる』喜びや実感をもち、確かな学力を身に付けた児童の育成～「書くこと」の領域における言語活動の充実を通して～」を設定した。

Ⅲ 研究の概要

1 研究の目標

「分かる」「できる」喜びや実感をもつことができ、確かな学力を身に付けた児童を育成するために、国語科の「書くこと」の領域において言語活動の充実を図った指導方法及び評価のあり方を究明する。

2 研究仮説

国語科の「書くこと」の領域において言語活動の充実を図った指導方法と評価のあり方を構築し、指導に生かすことができれば、各学年部の国語の目標を確実に達成し「分かる」「できる」喜びや実感をもち、確かな学力を身に付けた児童を育成することができるのではないかと。

3 研究の視点及び内容

(1) 研究の視点

- 「書くこと」の領域における言語活動の充実を図った指導方法と評価（授業デザイン）に関する研究

(2) 研究内容

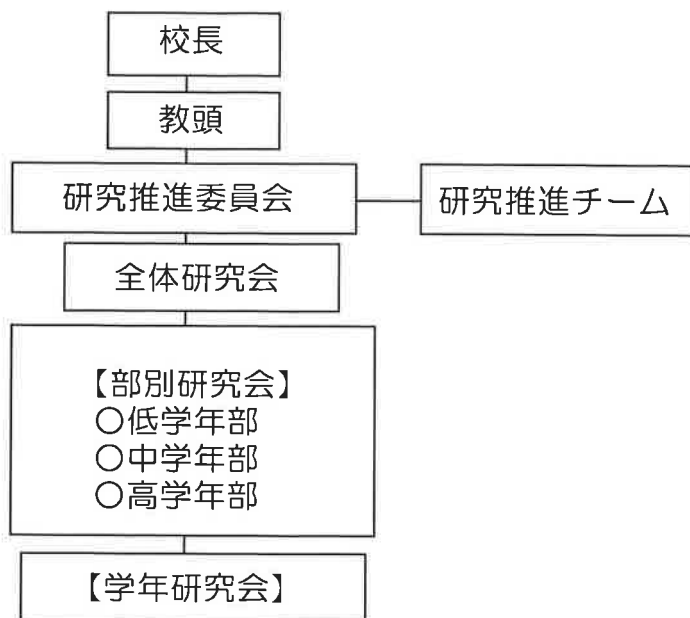
- ① 「書くこと」の領域の指導事項を確実に身に付けさせるために言語活動の充実を図った指導方法及び評価のあり方を究明する

ア 具体的な指導法に関する教材研究と授業実践

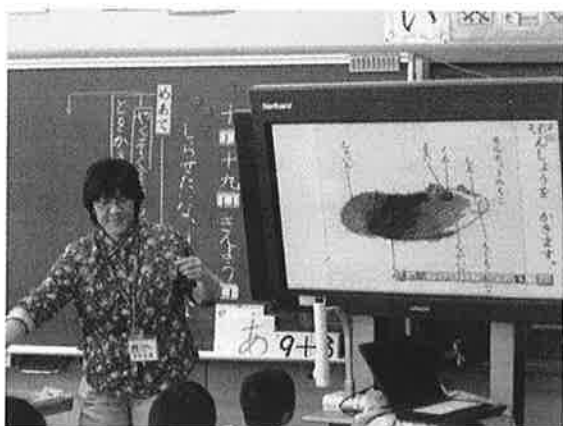
- 「書くこと」の指導事項及び言語活動例の共通認識
- 教材研究と授業実践
 - ・ 単元を貫く言語活動の位置付け
 - ・ 一単位時間の目標、めあて、たしかめ(めあて達成確認)の一貫性
 - ・ めあて達成の確認のあり方

- ② 言語活動を充実させる言語環境の整備
 - 言語活動を充実させる日常的な取り組み

4 研究組織

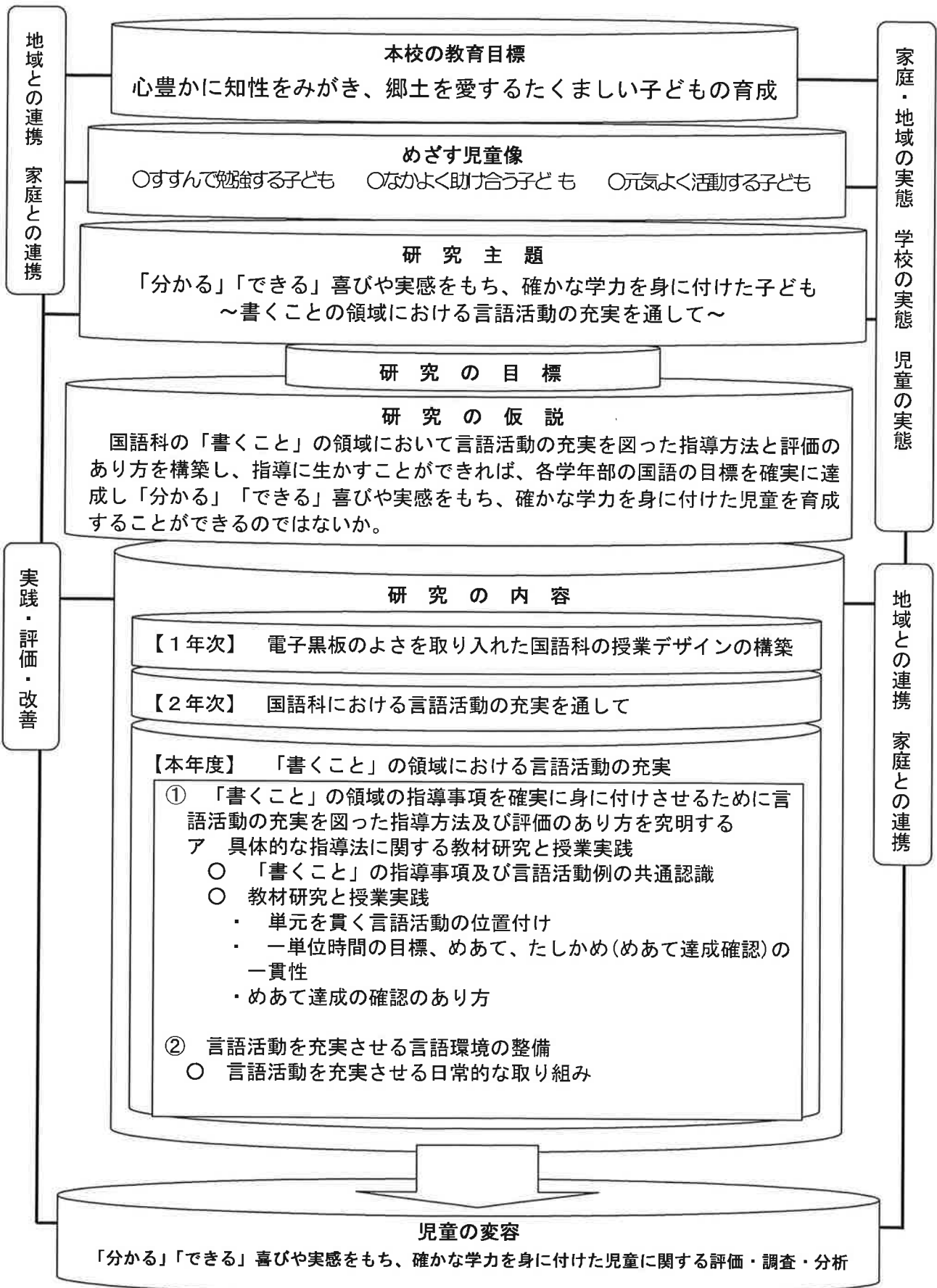


各学年部「事前授業風景」



各学年部において、研究授業者以外の担任による事前の検証授業が必ず行われた。

5 研究の全体構想



IV 研究経過

月	日	研究内容	研究形態	備考
4	1 1	本年度の研究の方向性、電子黒板について	全体研・学年研	
5	2 3	研究内容の提案、協議、研究の分担、アンケートについて	全体研・学年研	
	3 0	研究内容の検討、協議の柱の設定など	全体研・学年研	
6	1 3	第1回授業研究会の事前研究会①	学年部別研	
	2 0	第1回授業研究会の事前研究②	学年部別研	
	2 7	第1回授業研究会・事後研究会	学年部別研	学校訪問
7	4	第1回授業研究会を受けての成果と課題 研究の方向性の確認	全体研	
	2 3	書くことの指導内容の系統性について 言語環境について	全体研・学年部別研	
	2 4	2学期の共通実践について 〇めあて達成の確認の場に関する研究 実践報告会の準備	全体研・学年研	
	2 5	実践報告準備、学習コーナーの作業	学年研	
	2 6	1学期の児童の意識調査に関する集計	学年研	
	1	実践報告会	全体研	
8	2 2	第2回授業研究会の準備（教材研究） 〇研究の方向性の確認	学年研	
	2 9	研究の方向性の確認および言語活動の充実、 めあて達成の場に関する研究・教材研究	全体研	
	5	言語活動の充実、めあて達成の場に関する研 究・教材研究	学年研・全体研	
9	1 2	言語活動の充実、めあて達成の場に関する研 究・教材研究	学年研・全体研	
	1 9	研究授業の内容検討、協議の柱の設定	学年研・全体研	
	2 6	研究授業の内容検討、協議の柱の設定など 第2回授業研究会・事前研究①	全体研 学年部別研	
	3	第2回授業研究会・事前研究会②	学年部別研	
10	3 1	第2回授業研究会・事後研究会	学年部別研	
11	7	第2回授業研究会を受けての成果と課題	全体研	
12	5	研究紀要についての提案	全体研	
	2 5	研究紀要原稿作成、アンケート集計（後期）	全体研・学年研	
1	9	2学期の実践報告、児童の意識調査等の考察	学年研	
	1 6	研究紀要検討、アンケート報告 本年度の研究の振り返り等について	全体研	
	3 0	本年度のまとめと次年度の方向性について	全体研	
2	1 3	次年度の方向性について	全体研	
	2 0	次年度の方向性について	全体研	